

話題提供 2 「地域の副産物活用による牛肉生産」

芽室町農業協同組合  
畜産課 丸山真也

1. めむろ町の概要

めむろ町は、北海道東南部の十勝支庁管内に属し、西に雄大な日高山脈を望み、その裾野から広がる広大な十勝平野の中西部に位置し、東西 22.6 km、南北 35.4 km の大きさを持ち、その約 42% が農地、約 40% が山林となっている緑豊かな町である。

2. めむろ農業の概要

耕地面積は約 2 万 ha、農家戸数は 669 戸（畑作：593 戸、畜産 76 戸）であり、1 戸当りの耕作面積は約 31.5ha となっている。平成 20 年農畜産物総生産額は約 225 億円「農産 169 億（水田畑作経営安定対策金 55 億含む）、畜産 56 億」であり、平成 9 年度から 12 年間連続して 200 億円を超えている。

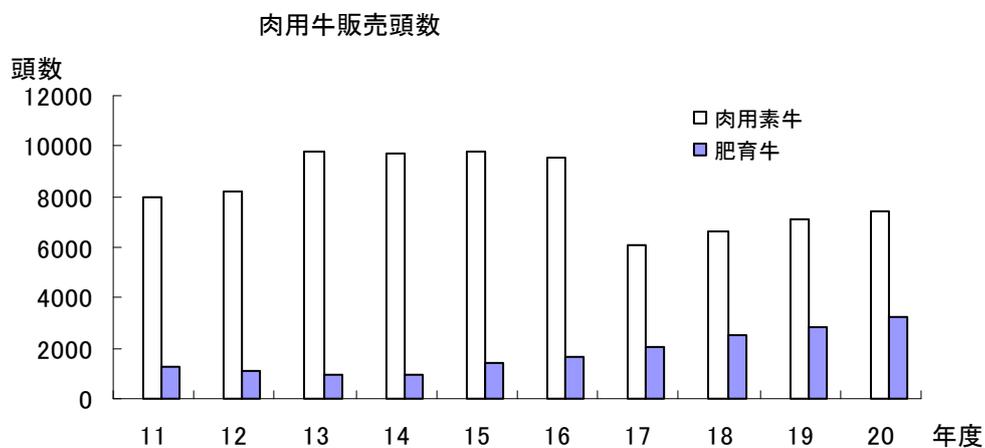
作付け作物及び面積（平成 21 年度）

単位：アール

作物名	作付実態面積	作物名	作付実態面積
小麦	634,046	かぼちゃ	20,718
豆類・雑穀計	230,198	たまねぎ	6,098
大豆	52,889	ごぼう	15,785
小豆	160,754	にんじん	12,633
金時	9,680	ながいも	32,767
手亡	6,153	だいこん	7,372
他豆類・雑穀	722	キャベツ	2,553
ばれいしょ計	335,448	えだまめ	32,900
種子用ばれいしょ	29,280	さやいんげん	15,697
食用ばれいしょ	96,994	その他青果	13,553
加工用ばれいしょ	164,562	牧草・その他計	229,196
澱原用ばれいしょ	44,612	牧草	130,849
甜菜	329,937	サイレージ用とうもろこし	68,088
青果・そ菜計	245,000	緑肥	12,003
スイートコーン	84,924	休耕地他	18,256
		合計	2,003,825

### 3. めむろの酪農・畜産の概要

酪農専業農家を中心に、59戸で乳用牛約7,000頭が飼養され、年間約35,000トンの生乳が生産されている。肉用牛は、11戸で乳雄6,500頭（育成4,100頭、肥育2,400頭）、交雑種（和牛×ホル）1,400頭（育成600頭、肥育800頭）、アンガス系160頭（繁殖70頭、肥育90頭）、和牛120頭（繁殖40頭、育成80頭）の計8,180頭飼養され、年間約3,200頭の肥育牛と約7,400頭の肉用素牛が出荷されている。その他、豚約4,500頭、馬約160頭が飼養されている。



### 4. めむろの肉用牛の歴史と現況

本町に肉専用種が初めて導入されたのは1967（昭和42）年で、オーストラリア産アンガス繁殖牛20頭輸入している。1頭22万円で8戸の農家が導入したが、気性があらく成績もあがらず、2戸の農家に集約されている。

その後オイルショックを経て、1977（昭和52）年から公社の貸付制度を利用しアンガスの導入をはじめ、一時は繁殖牛、肥育牛含め1,000頭を越す飼養頭数となった。アンガス種は草を肉に変える力はもちろんであるが、芽室にある圃場残渣物（麦稈・豆ガラ・ビートトップ）や加工副産物（ビートパルプ・スイートコーン粕・でんぷん粕）、規格外穀物（小麦くず・大豆くず）といった安価なえさの利用率が高い品種で、これらを活用し、できた堆肥を畑地に還元するといった循環型の牛肉生産を実践していた。

しかし、輸入自由化による価値観の低下、ロットの問題等で収益性が低下し、経営主の高齢化も影響し、BSEの発生を機に飼養戸数、頭数ともに激減し現在に至っている。

現況の戸数、頭数は前述のとおりであるが、主体となっている乳雄・交雑種の哺育育成や肥育経営においても、地域の副産物や自給飼料の利用を念頭に置いた飼養形態を取り入れている。

## 5. 地域の副産物等活用実態

主な副産物・自給飼料の使用量と給与方法

- 1) でんぷん粕 **800 トン**
  - ・ アンガス繁殖牛へ給与（15k g/日程度）
  - ・ アンガス系肥育牛へ通年給与（15k g/日程度）
  - ・ 乳雄・交雑種の育成期、肥育前期で給与（TMRへ原物5%配合）
- 2) スィートコーン粕 **1,100 トン**
  - ・ アンガス系繁殖牛へ冬期間給与（15k g/日程度）
  - ・ 乳雄・交雑種の肥育牛へ給与（5～10k g/日程度）
- 3) ビートパルプ（生） **1,000 トン**
  - ・ 乳雄・交雑種の肥育牛へ冬期間給与（10k g/日程度）
- 4) くず小麦 **1,000 トン**
  - ・ 乳雄・交雑種の肥育中期以降給与（TMRへ配合）
- 5) くず大豆 **150 トン**
  - ・ 乳雄・交雑種の育成期、肥育前期で給与（TMRへ配合）
- 6) デントコーンサイレージ **64ha 作付け**
  - ・ アンガス系繁殖牛へ冬期間給与（10k g/日程度）
  - ・ 乳雄・交雑種の育成期、肥育前期で給与（1.3～3.7k g/日程度）
- 7) 麦稈
  - ・ 肥育牛へ給与（チモシー乾草と併用）
- 8) その他

道内産のビール粕・しょうゆ粕・ポテトピール・ビートパルプ（P）を TMR 飼料の原料として利用している。

このように、それぞれの畜種にあった副産物を利用し、できた堆肥を経営内の畑地還元や麦稈との交換で他畑作農家へ還元し、循環型肉牛生産をおこなっている。

また、平成 20 年度より、畜産農家が耕種農家へデントコーンの栽培を委託した場合、反当り 3,000 円の助成をおこなう事業を起こし、耕畜連携を推進している。今年の実績では、畜産農家 7 戸（受託耕種農家 10 戸）で 29.5ha となっている。肉牛農家では、2 戸 12.1ha であるが、町外への委託も含めると 25ha の実績である。

## 6. 副産物活用や自給飼料多給における課題

### 1) 副産物の確保

配合飼料の高騰や酪農家の規模拡大に伴い、副産物の需要が高まり、以前のように希望数量の確保が難しくなっている。また、今年のように農作物の作柄が悪かった場合、配分量をカットされたりする。（粕類は特に）～農協の調整機能が必要

## 2) 自給飼料の確保

めむろは畑作地帯であり、農地価格も高く飼料畑面積の拡大は大きく望めない。

自給飼料の絶対量の確保が課題。～耕畜連携の推進と小麦後えん麦の飼料化の検討

## 3) 生産物（牛肉）の販売

生産方式を理解してくれる売り先の確保が課題。～格付けによらない価格設定（再生産可能な枝肉価格）

めむろ町は、地域内のいろいろな副産物を有効利用しながら、一貫して大衆牛肉を生産してきた。

今後ともこれを継続するとともに、生産方式を公開し、顔の見える安全・安心な牛肉の生産を実践していきたい。